



一九六八年から六二年の間、私はしばしばパリを訪れた。当時、私は、国際金融関係の仕事に携わり、同時に、一身上の都合から、

父の創設した予備校の塾主を兼ねていた。パリは田舎で外債の交渉など前者の仕事のため、フランス大蔵省や金融界の首脳とのたび重なる打ち合わせに連日忙しく動き回った。自然、近くのルーブルやオペラ座の周辺をめぐることが多くなった。

晩秋の冷雨に黒くぬれた芝道を、街路樹の落ち葉を踏みしめながら歩くと、私の心をどこか縛りつけていたのは、今ひとつの仕事だった。故国の青年たち、とりわけ予備校・大学年代の青年たちのことが頭から離れなかった。そのことは、当然、私にフランスの青年たちに目を向けさせた。

彼らは日本の若者とどこか違う——と感じはじめた。日本の若者の楽天的な明るい表情(悪い表現をすれば、問題意識のあまり感じられない野放図な明るさ)が、フランスの若者には全くない。むしろ深刻すぎるほど沈んだ(これまた悪く言えば、青年らしい希望のない)表情が多い。

またフランスの若者は、あまりお金を持っていない。あっても、やたらに使わないのかもしれないが、あたかも若者というものが、非消費の代名詞のように思えた。この点、日本の若者が金銭に不自由なく、しかも、コマーシャルのターゲットとなっているのと著しく違っていた。

青年の現在 パリ一名古屋

河合 斌 人



それまでフランスの若者が身につけているものは、どこか個性的で、この人でなければ身に着けられなくて、この人が着て、初めて精彩を放つという「自分主義」に貫かれていた。ガリ勉とアンビ上手が一人の若者に自然に同居してもいた。同世代に生きる同じ若者なのに、はなはだしい違いを見ることがあった。

この秋、百科全書派の領袖(じよつじゆつ)ジャン・ロの三百年祭がフランスで行われ、日本では京都大学でミッドトロ学会が開かれている。そこでは、戦後の文系学会では最大といわれるほどのフランス十八世紀学会の俊秀十六人が名古屋の「コマン」堂に会した。

私は、この機会を利用して、年来のフランスと日本の若者の違いにまつわる疑問にいろいろかきかきでも挑戦してみようと思いついた。「これらの若者を名古屋に招待し、丸二日かかりのシンポジウムを開く」というものだ。

幸い、京大のご好意もあり、来日する先生方も快く引き受けていたとき、二十五日開催が決まっている。テーマは、名古屋が泣いて喜びそうな(失礼)「青年の現在 パリ一名古屋」。

(河合文化教育研究所代表)

△△△ 河合さんは予備校・河合塾の理事長で、かつて証券会社の副社長も経験。海外生活も長い。若者の教育には「文化活動の真つじがなければ」と文化人とともに研究所をスタートさせたばかり。静岡県出身。六十六歳。